

高度生殖医療施設における臨床催眠療法について考える

田中 久美子 1)

HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

本発表では、高度生殖医療施設で、どのようなところのケアが患者にとって意義があるのか？真の意味で役に立つのだろうか？ということを改めて考えてみることを目的とした。

日本において、夫婦の 18.2%が不妊の検査及び治療をうけたことがある、または現在受けているとされたり、5,5組は不妊治療を行っているという報告がなされ、また世界でも約4850万組が不妊症であると推定されている。

今年の2022年4月より開始された不妊治療の保険適用は、これまで治療費用、経済的負担のため、不妊治療を受けることに対してハードルを高く感じていた患者にとって、治療開始のきっかけになっており不妊治療を実施できる施設への受診患者は増加している。

催眠療法は、催眠現象を活用した心理療法の一つであり一定の治療効果があるが、患者にとっては催眠療法への誤解や恐怖感をもち、警戒されることも少なくない。患者だけでなく医療スタッフにとっても、科学的ではない、何か怪しいものといった印象を与えており、敬遠されることが多いのではないだろうか。実際に、誤解ではなく悪用されて危なかったというケースもあるので臨床催眠療法を提供する側には、その場での合意形成やインフォームドコンセントから始めなければならない。そういったことを踏まえ、これまでに当院の取り組みを示す。

【臨床素材】

- ① 2015年、2016年、高度生殖医療の場に臨床催眠療法を導入する際の合意形成のプロセス
- ② 2017年5月臨床催眠集団療法の実施のプロセス
- ③ 個人イメージ療法 HORAC イメージ療法実施について

それぞれプロセスを臨床素材とこのタイミングで振り返り、結果を交えて当日に提示し、患者によりよいところのケアが提供できるよう考察する。